

ボアソナード記念現代法研究所

【2025 年度 大学評価総評】

2025 年度自己点検・評価シートにおける 2024 年度大学評価委員会の評価結果総評での指摘事項である研究叢書の未刊行分である 2 冊の刊行、研究所ウェブサイトの英文掲載・発信、公開シンポジウムの実施に対して、それぞれに適切に対応されてきたと評価できる。また、複数のプロジェクトでは公開セミナーが開催され、刊行された研究叢書を踏まえた研究成果報告のシンポジウムも開催されており、それらの成果の公表や対外的発信を期待したい。

2024 年度中期目標・年度目標達成状況報告書に対しては、年度目標が概ね達成されており、研究活動や社会貢献・社会連携が順調に進められていると確認できる。ただし、研究叢書を 4 冊刊行する予定のところ 3 冊の刊行に留まっており、また、その叢書の編集作業が年度末に集中する問題点については認識されていることから、2025 年度にて解決する方策を検討することが望まれる。

2025 年度中期目標・年度目標達成状況報告書については、2024 年度とほぼ同じ年度目標ならびに達成指標が設定されており、継続的な研究活動や社会貢献・社会連携の取り組みが計画されていると考えられる。これらの継続的な取り組みによる成果の充実・深化を期待したい。また、2024 年度に運用が開始された研究所ウェブサイトに英文掲載・発信におけるさらなる充実が望まれる。

【2025 年度 自己点検・評価結果】

I. 改善・向上の取り組み

(1) 2024 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2024 年度大学評価結果総評】(参考)

ボアソナード記念現代法研究所では、法史学、社会法、都市法、現代法システム、国際関係、ボアソナード関係資料収集委員会という 6 分野・12 プロジェクトの研究活動が展開されており、その成果も発表されている。2023 年度には、各プロジェクトの研究会を、対面・オンライン・ハイフレックスなど様々な形式で開催することを実現し、多様な研究者の参画が可能になったと評価できる。また、客員研究員に対する研究倫理教育を実施した点は適切な取り組みといえる。モンゴルの法曹実務家（憲法裁判所裁判官）が進行している現代法システム論「アジアにおけるドイツ型違憲審査システムの導入と機能」学際的プロジェクトに客員研究員として参加し、韓国大法院の元研究官を交えた関連オンライン研究会を開催するなど、海外研究者との連携も進められている点は評価でき、これらの研究成果が 2024 年度以降に発表されることを期待する。

これまでの研究プロジェクトは計 4 冊の研究叢書として発表予定で、すでに 2 冊が刊行されており、残り 2 冊の刊行が計画通りに進むことが望まれる。2024 年度からは、各プロジェクトの研究成果である叢書の内容の研究所ウェブサイト英文掲載、外部の学会との共同による公開シンポジウムなどが企画されており、こうした活動が研究所の認知度を高め研究成果への注目につながることを期待したい。

【2024 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

ボアソナード記念現代法研究所ではプロジェクト単位で研究活動を実施している。2024 年度は、法史学 (1)、社会法 (1)、都市法 (2)、現代法システム (7)、国際関係 (1)、ボアソナード関係資料収集委員会 (1) という、6 分野・13 プロジェクトが研究活動を実施し、研究成果を活発に発表した。これらの研究成果として 2024 年度には 2 冊の叢書が刊行された。

2024 年度は各プロジェクトが対面・オンライン・ハイフレックスなど様々な形式で研究会を積極的に開催した。その中には、学内外から広く参加を得た公開セミナーを開催したプロジェクトが複数あるのに加え、外部の学会との共同による公開シンポジウムもある。後者については、國分プロジェクトが、比較法学会第 87 回総会においてミニ・シンポジウム「韓国・台湾における憲法裁判制度と司法の変容」を実施した。円安や航空券・宿泊費高騰の中で海外からの研究者招聘が容易ではない中、オンラインを活用して海外の研究者による講演会を公開で開催したプロジェクトもある。これらの研究成果は 2025 年度以降に発表されることが期待できる。また、叢書を刊行したプロジェクトが、叢書をふまえた研究成果報告を他大学のシンポジウムで行うなど、研究成果の対外的発信も積極的に行われている。

2023年度の大学評価委員会の評価結果については、運営委員会で報告して情報共有し、指摘事項の改善に向けた検討を進めた。その1つとして、研究成果の英語発信の運用を開始した。また、大学評価委員会より期待されていた外部の学会との共同による公開シンポジウムも実施されるなど、研究成果の対外的発信による研究所の認知度向上にもつながっている。

(1) 改善・向上の取り組み（教員・教員組織）

<p>研究所（センター）内で教員の研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るために、組織的な取り組みを行い、成果を得ていますか。</p> <p>＜対応する大学基準：教育研究活動等の改善・向上、活性化につながる取り組みを組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上につなげていること。＞</p>	<p>S. さらに改善した又は新たに組み込んだ A. 概ね従来通りである又は特に問題ない B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。</p>	<p>A（概ね従来通りである又は特に問題ない）</p>
<p>上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。 Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。</p>		
<p>《内容》</p>		

(2) 改善・向上の取り組み（社会連携・社会貢献）

<p>社会連携・社会貢献に関する取り組みにより、地域や社会の課題解決等に貢献し、大学の存在価値を高めることにつながっていますか。</p> <p>＜対応する大学基準：社会連携・社会貢献活動の状況を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。＞</p>	<p>S. さらに改善した又は新たに組み込んだ A. 概ね従来通りである又は特に問題ない B. 更なる改善が必要な点がある 又は改善を困難とする要因がある。</p>	<p>A（概ね従来通りである又は特に問題ない）</p>
<p>上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。 Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。</p>		
<p>《内容》</p>		

II. 全学的な自己点検・評価結果より見出された重点的な評価項目

(1) 自由を生き抜く実践知を体現する取り組み

<p>研究所（センター）における「実践知」を体現する取り組みについて、改善・向上を図っていますか。</p> <p>＜対応する大学基準：社会連携・社会貢献活動の状況を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。＞</p>	<p>S. さらに改善した又は新たに組み込んだ A. 概ね従来通りである又は特に問題ない B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。</p>	<p>A（概ね従来通りである又は特に問題ない）</p>
<p>上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。 Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。</p>		
<p>《内容》</p>		

III. 2024年度中期目標・年度目標達成状況報告書

評価基準	研究活動
中期目標	<ul style="list-style-type: none"> 法学・政治学・国際政治学の分野におけるプロジェクト・ベースの高度な研究の推進 ボアソナード博士記念研究所として相応しい近代日本における法・政治制度に関する研究の実施
年度目標	<ul style="list-style-type: none"> プロジェクトごとの研究活動の着実な実施 外部研究者との連携等を含む開かれた研究の実践 各種資料等の収集・分析(特にボアソナード博士関連の資料)
達成指標	<ul style="list-style-type: none"> 各プロジェクトにおける研究活動の実施 各種資料等の収集・分析作業の実施

年度 末 報 告	執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	研究所が整備したオンライン会議システム等の活用に加えて、対面形式での研究活動も活発に行われた。プロジェクトはハイフレックス形式も含めた多様な方法により積極的に研究活動を進めた。また、各種資料の収集・分析作業にも一定の進捗があった。
	改善策	特になし。
評価基準		社会連携・社会貢献
中期目標		<ul style="list-style-type: none"> 研究成果の公開及び情報発信方法等の検討 所蔵資料等の公開
年度目標		<ul style="list-style-type: none"> 研究叢書の刊行 公開研究会・シンポジウム等の開催 所蔵資料等の整理・公開 研究成果の情報発信の運用開始
達成指標		<ul style="list-style-type: none"> 研究叢書を4冊刊行 公開研究会・シンポジウムを2回程度開催 所蔵資料等の整理・公開作業の実施 英語での研究成果の情報発信
年度 末 報 告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	刊行を予定した研究叢書4冊のうち、3冊は年度内に刊行する方向で刊行準備が進んでいる。英語での研究成果の情報発信方法については、今年度より運用を開始した。所蔵資料等の整理等も継続した。公開研究会はプロジェクトベースで複数回開催した。
	改善策	所蔵資料の整理に引き続き取り組む必要がある。また、研究所として公開研究会やシンポジウムを開催する場合は予算についても検討する必要がある。
<p>【重点目標】</p> <p>プロジェクトごとの研究活動の着実な実施</p> <p>【目標を達成するための施策等】</p> <p>各プロジェクトにおける研究活動の実施（研究叢書の刊行を含む）</p> <p>【年度目標達成状況総括】</p> <p>各プロジェクトはオンライン会議システムも活用して、積極的に研究活動を推進した。研究叢書は年度内に3冊を刊行する方向で準備が進んでいる。しかし、編集作業が年度末に集中する問題は解決できなかった。刊行スケジュールの前倒しについて、引き続き運営委員会等を通じて研究代表者に協力を要請する。</p> <p>英語での情報発信強化の方針に則って、研究所ウェブサイトも充実しつつある。</p> <p>シンポジウムの開催等については、運営委員会等を通じて、引き続きその必要性について議論していきたい。</p>		

IV. 2025年度中期目標・年度目標

評価基準	研究活動
中期目標	<ul style="list-style-type: none"> 法学・政治学・国際政治学の分野におけるプロジェクト・ベースの高度な研究の推進 ボアソナード博士記念研究所として相応しい近代日本における法・政治制度に関する研究の実施
年度目標	<ul style="list-style-type: none"> プロジェクトごとの研究活動の着実な実施 外部研究者との連携等を含む開かれた研究の実践 各種資料等の収集・分析(特にボアソナード博士関連の資料)
達成指標	<ul style="list-style-type: none"> 各プロジェクトにおける研究活動の実施

	・各種資料等の収集・分析作業の実施
評価基準	社会連携・社会貢献
中期目標	・研究成果の公開及び情報発信方法等の検討 ・所蔵資料等の公開
年度目標	・研究叢書の刊行 ・公開研究会・シンポジウム等の開催 ・所蔵資料等の整理・公開 ・研究成果の情報発信
達成指標	・研究叢書を3冊刊行 ・公開研究会・シンポジウムを2回程度開催 ・所蔵資料等の整理・公開作業の実施 ・英語での研究成果の情報発信
【重点目標】 プロジェクトごとの研究活動の着実な実施 【目標を達成するための施策等】 各プロジェクトにおける研究活動の実施（研究叢書の刊行を含む）	

IV-2. 2025年度中期目標・年度目標達成状況報告書

ボアソナード記念現代法研究所

評価基準	中期目標 (2022-2025年度)	年度目標	達成指標	年度末報告		
				教授会執行部による点検・評価（教授会承認）		
				自己評価	理由	改善策
研究活動	<ul style="list-style-type: none"> 法学・政治学・国際政治学の分野におけるプロジェクト・ベースの高度な研究の推進 ボアソナード博士記念研究所として相応しい近代日本における法・政治制度に関する研究の実施 	<ul style="list-style-type: none"> プロジェクトごとの研究活動の着実な実施 外部研究者との連携等を含む開かれた研究の実践 各種資料等の収集・分析(特にボアソナード博士関連の資料) 	<ul style="list-style-type: none"> 各プロジェクトにおける研究活動の実施 各種資料等の収集・分析作業の実施 	A	各プロジェクトが、オンライン会議システムを活用して、対面とリアルタイムオンラインの併用といった多様な方法によって研究活動を進めた。各プロジェクトが、本研究所の客員研究員だけではなく、外部研究者を講師として招聘して研究を実践した。各種資料の収集・分析作業を進めた。	特になし。
社会貢献・社会連携	<ul style="list-style-type: none"> 研究成果の公開及び情報発信方法等の検討 所蔵資料等の公開 	<ul style="list-style-type: none"> 研究叢書の刊行 公開研究会・シンポジウム等の開催 所蔵資料等の整理・公開 研究成果の情報発信 	<ul style="list-style-type: none"> 研究叢書を3冊刊行 公開研究会・シンポジウムを2回程度開催 所蔵資料等の整理・公開作業の実施 英語での研究成果の情報発信 	A	刊行を予定した研究叢書3冊については、年度内に刊行する方向で刊行準備が進んでいる。また、各プロジェクトが、公開研究会やシンポジウムを複数回開催した（例えば大澤プロジェクトが4月と5月に国際シンポジウムを開催した）。英語での研究成果の情報発信や所蔵資料の整理・公開作業を進めた。2027年度の現代法研究所開所50周年に向けて、記念論文集等を発刊する計画を立てたところである。	英語での研究成果の一層の発信や、所蔵資料の整理・公開作業に引き続き取り組む必要がある。また、研究所としての公開研究会を開催する場合には、予算についての検討が不可欠である。50周年記念論文集を充実させる作業を引き続き行うべきである。

自己評価について

- S 目標を十分達成し、質の向上が顕著である。
- A 目標をほぼ達成し、質の向上が見られる。
- B 目標の達成が不十分である。
- C 目標が達成できていない。

【重点目標】	【目標を達成するための施策等】
プロジェクトごとの研究活動の着実な実施☑	各プロジェクトにおける研究活動の実施（研究叢書の刊行を含む）
【年度目標達成状況総括】	
<p>各プロジェクトはオンライン会議システムと対面開催の併用による積極的な研究活動を推進した。研究叢書は年度内に3冊を刊行する方向で準備が進んでいる。しかし、充実した研究叢書を発刊するための予算不足は解消されていない。英語での情報発信強化の方針に則って、研究所ウェブサイトも充実しつつある。50周年記念論文集発刊の計画を立てたことから、研究所としての研究成果の充実・公開に向けた取り組みに一層力を入れたい。</p>	